

# 佐野町場における民家群の外観的特徴に関する研究

和歌山大学大学院システム工学研究科 近藤 幸介  
和歌山大学システム工学部環境システム学科講師 林田 大作

## 1. 背景と目的

南海本線泉佐野駅の北側に広がる旧市街地（佐野町場）には歴史的な建築物が数多く残されている。食野家のいろは48蔵の名残が感じられる「いろは蔵通り」や古くは船からおろした荷を乗せた荷車が往来し、にぎわった「くるまみち」などは、歴史的な風情が感じられる。

また、佐野町場を拠点に活動する団体である「NPO法人泉州佐野にぎわい本舗」は、佐野町場を活性化させる活動を行っている。また、佐野町場の中心部に位置し、泉佐野市指定文化財である旧新川家住宅では、朝市などの催しなどを行っている。

しかし、歴史的な建物を保存するための試みはあまり行われていない。建物の老朽化が進み、他の集落と同じように若い世代が他の場所へ流れ、使われなくなった建物の管理の難しさから取り壊され、歴史的価値がある町並みがなくなる危機に瀕している。また、関西国際空港の整備や泉佐野駅の再開発も町並みに影響を及ぼしている。

このような町並みがなくなる前に記録・保存し、改めてその町並みの特徴を認識するために本調査を行うことは非常に重要である。

本研究では佐野町場における民家群の外観的特徴を明らかにし、町並み保全のための知見を抽出することを目的とする。

## 2. 佐野町場の概要

泉佐野市は大阪府の南部に位置し、北西部に大阪湾を臨み、南東部に和泉山脈をもつ平地である。本研究の対象地である佐野町場は、大阪湾に面する旧佐野村の一部であり、孝子越街道や熊野街道が通る宿場町として古くから栄えていた。市場が発展した孝子越街道には現在でも「つばさ通り商店街」がある。



図1. 佐野町場の概略図

古来より都と紀伊を結ぶ主要幹線の経路である「南海道」の経路あたり、早くから集落が形成された。また、平安時代以降、熊野参詣のための「熊野大道」の経路となり、宿場町が成立していたと考えられる。

毎月2・7の日が定日の六斎市という定期市も設けられていたため、早くから「市場」として発展してきた。また、定期市以外の日にも、そこに定住する商人たちの往来があった。

江戸時代には「市場」としての町機能よりも、水産業・廻船業としての「佐野町場」の機能が重要になり、この地域の中心的地位を占めるようになる。

江戸時代中期に入り、佐野は急速な発展を見せる。慶長20年(1615年)には350家が棟役銭を課せられているが、正徳3年(1713年)には家数1666戸、人口8597人となり、堺の5万には到底及ばないが、泉州では最も人口の多い町であったようである。なかでも豪商の食野家・唐金家は井原西鶴の「日本永代蔵」にも登場する。このころの佐野は、和泉国では堺に次ぐ商業都市であった。

### 3-1. 建物外観調査について

外観調査はチェックシートの項目にチェックをつける形で行った。調査方法は住宅地図上で建物に番号をつけ、外観調査用チェックシートを用いてチェックを行い、1件につき最低1枚の写真を撮影するという方法で行った。

外観調査チェックシート		月	日
建物番号			
用途	<ul style="list-style-type: none"> <li>主屋</li> <li>付属屋 蔵・物置・納屋</li> <li>その他</li> </ul>		
建築年代	<ul style="list-style-type: none"> <li>江戸・明治・大正・昭和30年以前・昭和30年以降</li> <li>それ以降</li> </ul>		
構造形式	木造・鉄骨造・RC造		
階数	平屋・つし2階・本2階・3階		
屋根形式	<ul style="list-style-type: none"> <li>切妻(平入・妻入)・寄棟(平入・妻入)・入母屋(平入・妻入)</li> <li>片流れ(平入・妻入)</li> <li>その他</li> </ul>		
付属物	<ul style="list-style-type: none"> <li>起り(有・無)・千木板(有・無)</li> </ul>		
屋根葺材	<ul style="list-style-type: none"> <li>本瓦・草葺・トタン・ナマコ・擬瓦・タン</li> <li>棧瓦</li> </ul>		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>その他</li> </ul>		
鬼瓦	鬼面・水紋・家紋・覆輪		
軒先(1F)	<ul style="list-style-type: none"> <li>オダレ・破風板・袖壁</li> <li>せがい・出桁(丸材・角材)・持ち送り板(木製・金属製)</li> <li>その他</li> </ul>		
軒先(2F)	<ul style="list-style-type: none"> <li>オダレ・破風板・袖壁</li> <li>せがい・出桁(丸材・角材)・持ち送り板(木製・金属製)</li> <li>その他</li> </ul>		
壁(正面)	<ul style="list-style-type: none"> <li>漆喰・土壁・RC・板壁・トタン貼・杉皮貼</li> <li>その他</li> </ul>		
壁(側面)	<ul style="list-style-type: none"> <li>漆喰・土壁・RC・板壁・トタン貼・杉皮貼</li> <li>その他</li> </ul>		

図2. チェックシート

### 3-2. 調査件数について

調査は平成19年10月19日、22日、24日、25日、26日、27日、31日の7日間で行った。

今回の外観調査で対象になった建物（調査対象建物）は昭和40年代以降に建てられたと思われる建物を除いたため225件となった。

また、同じ形態で連続して建っている建物、2軒以上がつながっている長屋、同じ敷地内に建てられている複数の建物は1件とみなした。

図3は今回の調査対象である建物の分布を示している。



図3. 調査対象建物の分布

### 3-3. 項目別の考察

階数は平屋が84件(37.3%)、つし2階が60件(26.7%)、本2階が81件(36.0%)であった。

この結果から、平屋・本2階の割合はほぼ同等でつし2階は若干少ないことがわかった。

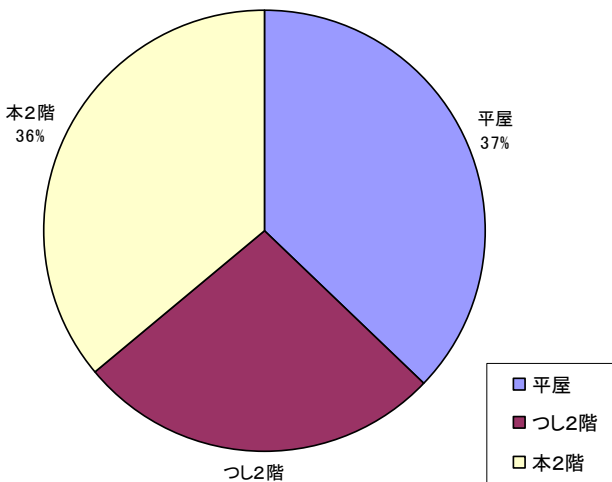


図4. 階数別の割合

屋根形式で最も多かったものは、切妻屋根で138件(61.3%)であった。次に入母屋屋根で77件(33.2%)、寄棟は8件(3.6%)であった。

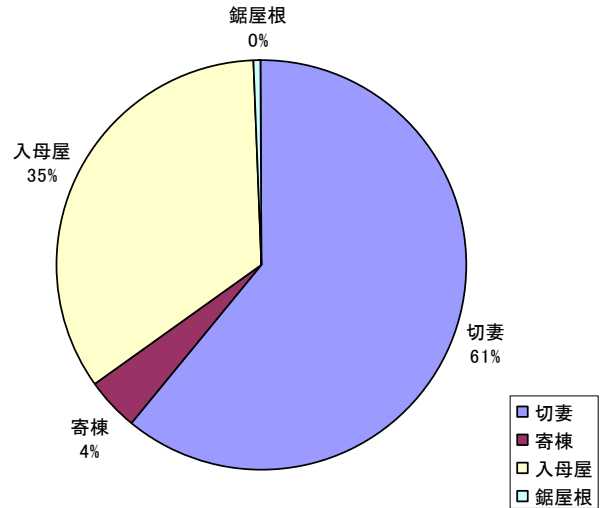


図5. 屋根形式種類別の割合

屋根葺材で最も多かったのは、棧瓦の万十で119件(52.9%)であった。この中には新しいと思われるものも多く見られ、葺き替えて棧瓦の万十に変えたのであろうと推測される。次に多かったものは、本瓦で76件(33.8%)であった。本瓦で葺かれているものでは、傷みが進んでいるものが見られた。本瓦で残っているものは何らかの理由で葺き替えられていないものが多いと考えられる。

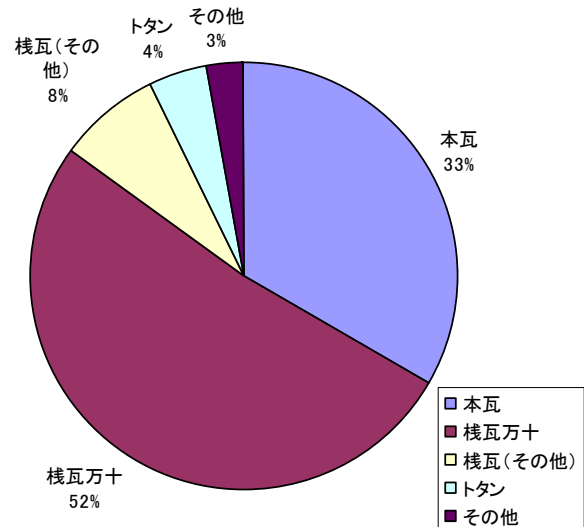


図6. 屋根葺材の割合

鬼瓦が確認されたのは、全部で158件であった。そのうち最も多く確認されたのは覆輪で、100件(63%)あり、次に宝珠の38件(24%)であった。その他の鬼瓦では、家紋が1件(0.4%)、鬼面3件(1.3%)であった。覆輪は新しいものも多く、葺き替えられる場合に覆輪になるのではないかと考えられる。また、宝珠は仏教の影響をうけた

もので、何でも願いがかなうという意味がある。本研究の対象地の中には3軒寺があり、他に対象地に隣接しているものが2軒ある。

寺院の至近距離に宝珠の鬼瓦を持った建物が密集しているわけではないが、寺院が存在することによってこの地域に宝珠の鬼瓦が多いことが関係するのではないかと考えられる。

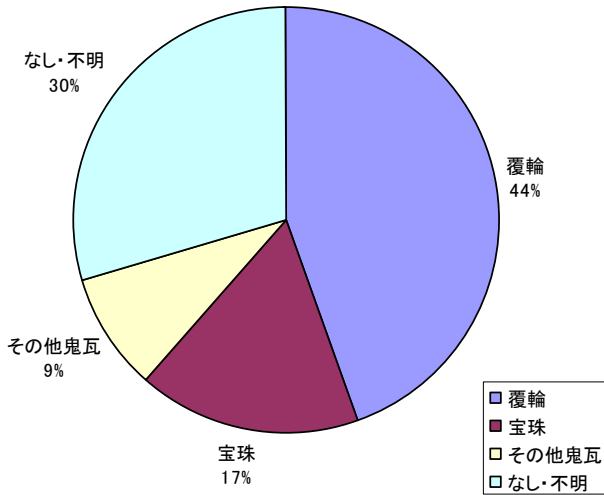


図7. 屋根葺材の割合

#### 4-1. 分類の方法

今回の調査対象建物を、次にあげる項目ごとに分類し、佐野町場を構成する建物の外観的特徴をさらに詳しく考察した。

本研究では民家だけではなく、蔵・工場なども歴史的価値が高いと思われるものがあつたために対象とした。

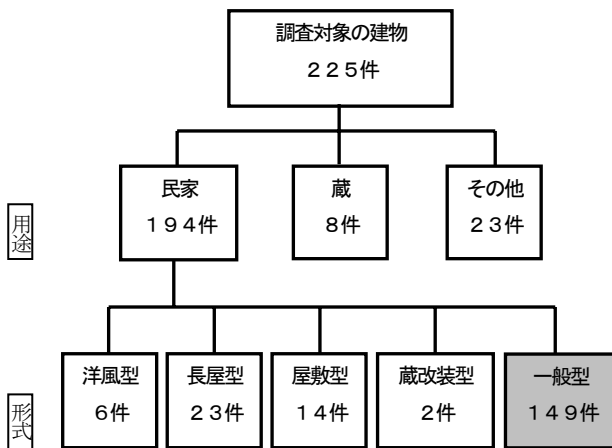


図8. 用途形式による分類

#### 4-2. 分類結果

その他は23件あり、工場や店舗、理髪店などが見られた。工場があるのは日本有数の綿織物の生産地であるため紡績業を続けている工場があるためであると考えられる。

また、蔵は廻船問屋の名残であると考えられる。

#### 〈洋風型〉

洋風建築の要素が2つ以上あるものを洋風型とする。洋風型のもは全部で6件であつた。そのうちの、5件は下見板張りであつた。



図9. 洋風型の分布

#### 〈長屋型〉

2軒以上水平方向につながって壁を共有し、一見して1軒の民家に見える建物とする。

全部で21件あつた。佐野町場において長屋は、それが存在する場所が集中していることが特徴であつた。



図10. 長屋型の分布

#### 〈屋敷型〉

同じ敷地内に2つ建物が建っていたり、敷地の2面以上が道路に面していたりしている比較的大きな建物とする。屋敷型は全部で14件であつた。

それらの多くは街道周辺に見られる。街道沿いは古くか

ら賑わっていて、発展していったため屋敷のような大きな建物が残っているのではないかと考えられる。



図 11. 屋敷型の分布

で屋根葺材に万十、鬼瓦は覆輪で壁（側面）には板壁が使われているものが多かった。



図 13. 一般型の分布

#### 〈蔵改装型〉

蔵が工場やアパートなどとして利用されており、このように使用されているものを蔵改装型とする。

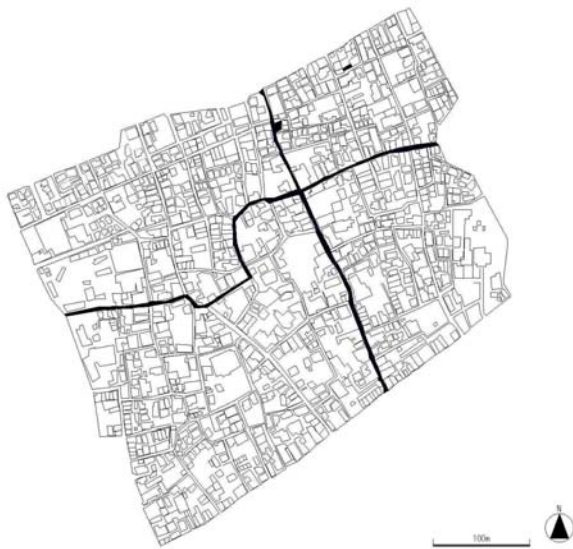


図 12. 蔵改装型の分布

#### 〈一般型〉

分類するにあたり、洋風型、長屋型、屋敷型、蔵改装型という形式に属さないが、一般的で多数見られ、支配的であった建物を「一般型」とした。

最も件数の多い一般型のものを階数別に見ると、それぞれの特徴が見えた。平屋では、屋根形式が切妻屋根のものが多かった。つし2階は、屋根葺材が本瓦で鬼瓦には宝珠を使われているものが比較的多く、壁（正面）は漆喰+板壁であるものが多かった。本2階では、屋根形式が入母屋

#### 5. まとめ

今回の調査では民家が194件と最も多かったが、商家であったと考えられる民家は多くは見られなかった。蔵もかつては浜辺にいろは48蔵と呼ばれる蔵が多く存在していたにもかかわらず、今となっては8件しか残っていない。しかし、商家は街道沿いに偏っており、かつてその場所が市場などの主要な場所であったことを示している。そのため、件数は少数ではあるが存在感がある。蔵も同様に少数ではあるが、それらがかつての浜辺にあったということ物語っている。このように歴史が感じられる建物が少数ではあるが残っているために佐野町場は趣きが感じられる。

考察の結果、民家は5つの型に分類できた。その中でも一般型は多数を占め支配的であった。一般型を階数別に考察すると、つし2階で鬼瓦に宝珠、屋根葺材に本瓦を使用しているものが平屋や本2階よりも多かった。宝珠は寺町に多く、本瓦は年代が古いと考えられ、寺が密集していて、豪商が古くから多い。そのため、つし2階では特に佐野町場の特徴が感じられる。

本研究で明らかになった「一般型」を主体とする民家群の外観的特徴は今後の佐野町場のまちづくりにおいて、町並み保全の観点から有用であると考えられる。

#### 参考文献

- 1) 土平博 (1996年) 「新修泉佐野市史研究」、泉佐野市編さん委員会、泉佐野市教育委員会
- 2) 泉佐野市史編さん委員会 (1958年) 「泉佐野市史」、泉佐野市役所
- 3) 藤岡建築研究室 (1996年) 「泉佐野市指定文化財旧新川家住宅保存復原整備事業報告書」、藤岡建築研究室編、泉佐野教育委員会